令和四年度 鹿児島大学附属図書館
霧島市教育委員会共催 貴重書公開

神をめぐる人々

―薩摩藩の学者たち―

鹿児島大学附属図書館

はじめに

鹿児島大学附属図書館では、所蔵貴重資料のデジタル画像化及び公開事業に継続して取り組むとともに、毎年度、テーマを決めて中央図書館において、貴重書の展示公開を行っております。本年度は、霧島市教育委員会との共催で「神をめぐる人々－薩摩藩の学者たち－」と題して開催することになりました。展示期間には、本学学術研究院法文教育学域の日隈正守教授（教育学系）と亀井森准教授（教育学系）による記念講演会やギャラリートークも企画しています。本展が、身近な地域の歴史・文化について、新たな情報を得たり関心を深めたりする機会となりましたら幸いでございます。

最後になりましたが、開催にあたりまして、鹿児島県歴史・美術センター黎明館、鹿児島県立図書館、鹿児島市立図書館、新田神社、薩摩川内市川内歴史資料館ならびに所蔵者の皆様に、貴重な資料等の貸与をご快諾いただき、展示内容の充実にご協力を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

令和４年11月

鹿児島大学附属図書館長　　橋口　知

目　次

神をめぐる人々－薩摩藩の学者たち－　趣旨…… 1

第１章　神代三陵とはなにか…… 1

第２章　薩摩藩の学者たち…… 4

第３章　後醍院真柱…… 8

第４章　祭神…… 12

第５章　神代三陵と明治政府…… 15

神をめぐる人々－薩摩藩の学者たち－　趣旨

今年度の貴重書公開は、神代三陵（神代三山陵・神代山陵）をめぐる神話・伝承、歴史と人間との関わりについて、鹿児島大学附属図書館をはじめ他機関所蔵の諸資料を展示して様々な視点から考えようとするものです。

神代三陵は日本神話に登場する神々である瓊瓊杵尊・彦火火出見尊・鸕鷀草葺不合尊の陵墓の総称で現在の鹿児島県に治定（決定すること、落ち着くこと）されています。

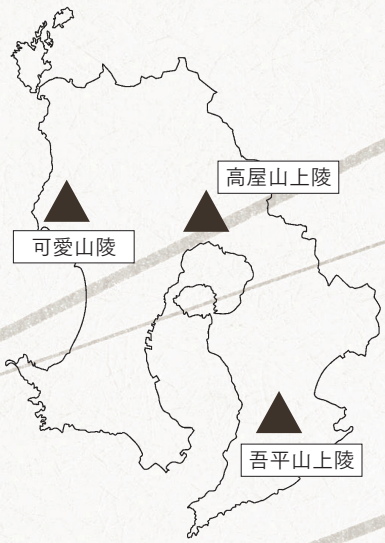
鹿児島市立図書館には江戸時代後期の薩摩藩士後醍院真柱が著したこの神代三陵の研究書『神代三陵志』の複数段階にわたる稿本が所蔵されています。本書はそれまでの研究をふまえて三山陵の所在地を考証し、その後の神代三陵の場所決定に大きな影響を与えています。

本展示はまず白尾国柱ら薩摩藩の学者たちの功績を追いながら、後醍院真柱を学問的に位置付けます。さらに鹿児島の地理的特性や神話・伝承、新田神社（薩摩川内市）・鹿児島神宮（霧島市）などの祭神、また明治政府との関わりなど様々な切り口から神代三陵に焦点を当てるものです。

第１章　神代三陵とはなにか

本章では神代三陵とはどういうものなのか、そこにどのような問題が横たわっているのかを考えていきたいと思います。まずは３柱の神様についてご説明し、そのお墓（陵墓）についてみていきましょう。

現在、鹿児島県内には神代（神話・神々の時代）の３神（柱）の陵墓が治定されています。それは以下の３つの陵墓です。



可愛山陵（薩摩川内市宮内町）

高天原の太陽の神天照大神の孫にあたる瓊瓊杵尊の陵墓とされます。瓊瓊杵尊は日向三代の初代で、神武天皇の曾祖父にあたります。木花開耶姫を娶りました。

高屋山上陵（霧島市溝辺町）

瓊瓊杵尊と木花開耶姫との子である彦火火出見尊（火折尊、火遠理尊）の陵墓とされます。「海幸山幸」と呼ばれる神話の山幸彦にあたります。妻の豊玉姫は次の鸕鷀草葺不合尊を生みました。

吾平山上陵（鹿屋市吾平町）

鸕鷀草葺不合尊の陵墓とされます。尊は豊玉姫の妹である玉依姫（玉依毘売）と結婚し、その間に生まれたのが初代天皇・神武天皇となります。

この陵墓の場所は明治７年（1874）に当時の宮内省が定めたものですが、この場所に治定するまでには他にもいくつかの候補地がありました。

なぜはっきりしないのかというと、『古事記』『日本書紀』では大まかな場所しか書かれていないからです。神代三山陵の場所はいったいどこなのか、学者をはじめ多くの人々がそれを解明しようと取り組みました。それが本展示でとりあげる「神をめぐる人々」です。（亀井）

1．神代三山陵

鹿児島大学附属図書館

本書は昭和10年（1935）刊。鹿児島史談会編。

『古事記』『日本書紀』の記述に基づき、薩摩藩あるいは鹿児島出身の藩士・国学者・官僚たちが、それぞれ瓊瓊杵尊・彦火火出見尊・鸕鷀草葺不合尊の陵墓の場所を考証した研究書をまとめたものである。

収録されている主な資料は以下の通りである。

白尾国柱『神代山陵考』寛政４年（1792）
同『神代三陵取調書』文化11年（1814）
後醍院真柱『神代三陵志』明治２年（1869）
樺山資雄『神代三陵異考』明治８年（1875）
田中頼庸『高屋山陵考』明治４年（1871）

その他、三山陵を整備する際にかかる費用の見積もりを示した『神代三陵造立目論見入費帳』（後掲資料23）を収め、江戸時代から近代にかけての神代三陵に関する基本的な研究書を収録している。

（亀井）

2．古事記・日本書紀

鹿児島大学附属図書館

『鼇頭古事記』

度会延佳校。３巻３冊刊。玉里文庫天の部１番９。貞享４年跋、京都菱屋又兵衛他刊。島津久光書入。

『日本書紀』

30巻15冊刊。玉里文庫天の部１番１。

『日本書紀』神代紀では神代三山陵について以下のように記載されている。

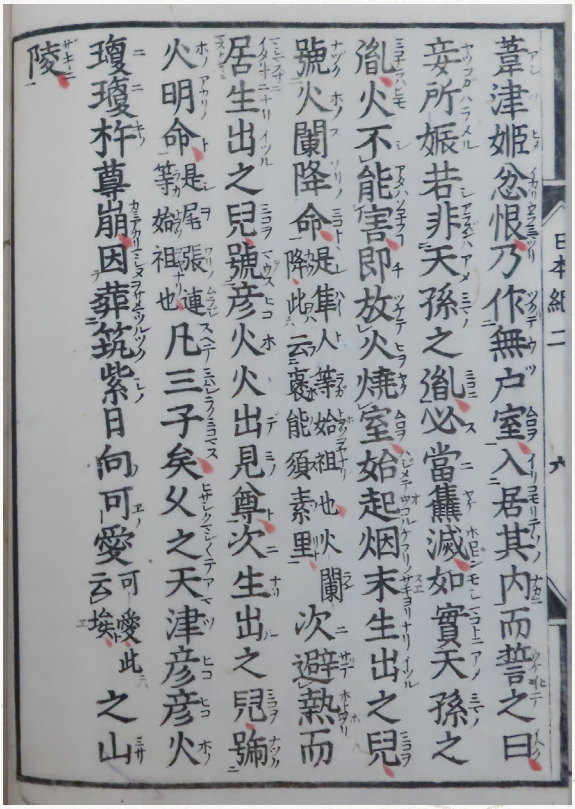
瓊瓊杵尊は「崩因葬筑紫日向可愛之山陵」
（崩御されたので日向可愛之山陵に葬る）

彦火火出見尊は「崩葬日向高屋山上陵」
（崩御されたので日向高屋山上陵に葬る）

鸕鷀草葺不合尊は「崩於西州之宮、因葬日向吾平山上陵」
（西州之宮で崩御され、よって日向の吾平山上陵に葬る）

このように神代三陵は日向のどこかにあるとされてきたが具体的な記述はない。日向もいまの日向なのかも含めて、ここに論争が生まれるのである。

（亀井）



『日本書紀』可愛山陵の部分

３．麑藩名勝考（げいはんめいしょうこう）

鹿児島大学附属図書館　10冊

白尾国柱著。寛政７年（1795）序。

本書は薩摩藩内の古跡や名勝の由来・伝承に挿絵を付した地誌である。『薩藩名勝志』（1806）、『三国名勝図会』（1843）に先行するものである。

巻２に可愛山陵（写真左）、巻７に高屋山上陵・吾平山上陵（同右）が記されているが、可愛山陵は現在地とは異なる中陵（なかのみささぎ）にあるとする。

また高屋山上陵も同様に現在の霧島市溝辺町ではなく、肝属郡内之浦郷小串村国見岳（国見山）にあるとする。

（亀井）

４．三国名勝図会（さんごくめいしょうずえ）

鹿児島大学附属図書館　60冊

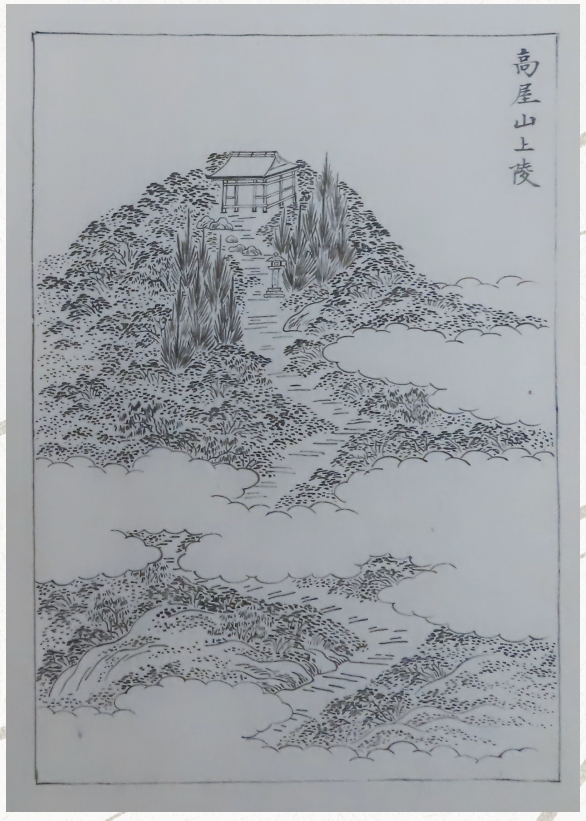
薩摩藩が編纂した薩摩国・大隅国・日向国（一部）３国における神社仏閣の由緒や縁起、名所旧跡の由来などを記した地誌である。

当時の藩主島津斉興が橋口兼古・五代秀尭・橋口兼柄らに命じて天保14年（1843）にまとめられた。

現在では明治初期の廃仏毀釈によって失われた寺院など当時の薩摩藩領内の様子を知るための貴重な資料となっている。

写真は内之浦の国見岳の山頂にあったと推定されていた高屋山上陵（彦火火出見尊陵墓）の俯瞰図である。現在とは異なる場所であるが、後述する白尾国柱など江戸時代の学者の多くはこの場所が高屋山上陵と考えていたようである。

（亀井）



第２章　薩摩藩の学者たち

本章では薩摩藩における国学者たちを取り上げます。特に江戸後期の藩主島津重豪に重用された白尾国柱を中心として、本居宣長や平田篤胤ら中央の学者たちとの関わりをみていきます。
また神代三山陵や霧島との関わりから、白尾国柱『神代山陵考』、八田知紀『襲峯一覧』『霧嶋山幽郷真語』など薩摩藩の国学者たちの研究や情報のネットワークを紐解いていきたいと思います。

薩摩藩の国学者たち

薩摩藩における国学のはじまりは第８代藩主島津重豪（1745－1833）の頃で、白尾国柱が『神代三陵考』など様々な書籍編纂活動を行いました。白尾国柱の後、山田清安・葛城彦一といった国学者が出ましたが、重豪の影響を強く受けた斉彬を藩主へ擁立しようと動いていたため、嘉永朋党事件（お由羅騒動・高崎崩れ、1849－1850）で処罰を受け、散り散りとなってしまいます。

しかし、斉彬が藩主となってからは、山田清安の教えを受けた八田知紀、後醍院真柱らに造士館での国学の講義を命じます。明治維新の頃には平田国学の影響を受けた税所篤・岩下方平などを通じて藩上層部へも国学が浸透していきました。明治初期には八田知紀やその弟子の高崎正風などが新政府の御歌掛や御歌所長を務め、宮中の和歌の発展にも貢献しています。また田中頼庸や樺山資雄らが三山陵の調査を引き継いでいきました。

（小水流）

国学者　白尾国柱

白尾国柱は宝暦12年（1762）生、文政４年（1821）没、60歳。薩摩藩士。

本田親昌の次男として生まれ、寛政２年（1790）に槍術師範白尾国倫の養子となる。通称は斎蔵、号は鼓川（鼓泉）・瑞楓。

若くして神代三山陵について考察した『神代山陵考』や薩摩藩内の神社等の由来や伝説をまとめた『麑藩名勝考』などを著し、その学識を藩主島津重豪に認められる。重豪の命により、農事に関する百科事典である『成形図説』や薩摩藩内の伝説・奇話を集めた『倭文麻環』を編纂するなど藩の文事に大きく貢献した。

薩摩藩国学の嚆矢といわれ、薩摩藩の神話・伝承について調査・考証し、その著作は後の学者たちへ多大な影響を与えた。

（小水流）

白尾国柱墓碑（鹿児島市池之上町福昌寺跡）

5．神代山陵考

鹿児島県立図書館　1冊

白尾国柱著。寛政４年（1792）奥書。

本書は漢文によって記された神代三山陵についての研究書。本書によって提示された三陵墓の推定地を基に、のちに後醍院真柱、樺山資雄、田中頼庸らの説が花開くことになる。

白尾国柱が推定した神代三山陵の場所は次の通りである。

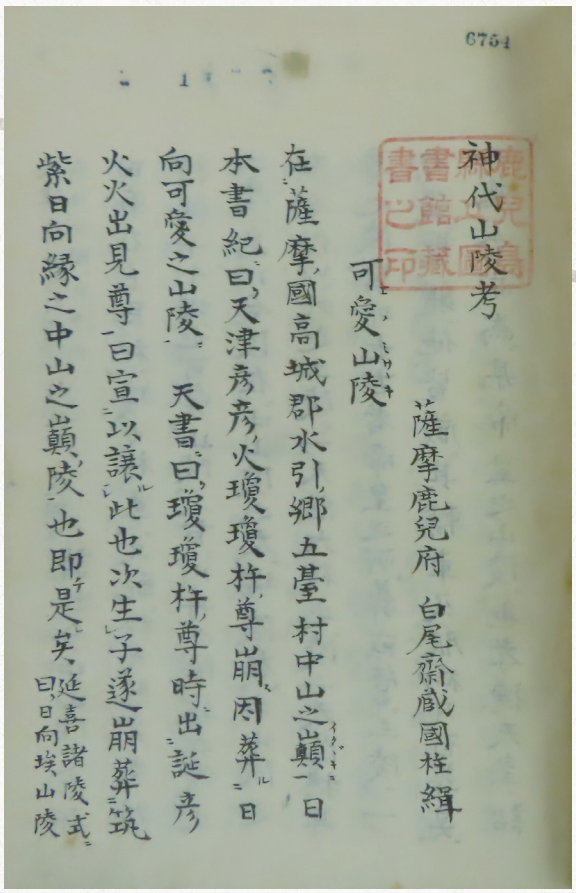
可愛山陵は「薩摩国高城郡水引郷五台（ママ）村中山之嶺」（写真）とあり、現在の新田神社の奥にある場所とは異なる場所を推定している。

高屋山上陵は「大隅国肝属郡内浦郷北方村高屋山之嶺」とあり、現在の国見山山頂を高屋山上陵と考えていたことが分かる。

吾平山上陵は「大隅国肝属郡姶良郷上名村」とあり、現在地と同じである。

この『神代山陵考』は本居宣長『古事記伝』に引用されたことによってひとつの権威となり、全国的に知られることとなった。

なお本書は『神代三山陵』（前掲資料１）に所収されている。　（亀井）


6754

神代山陵考

薩摩鹿兒府　白尾齋藏國柱編

可愛山陵

在薩摩國高城郡水引郷五臺村中山之巔一日
本書紀曰天津彦彦火瓊瓊杵尊崩因葬二日
向可愛之山陵　天書曰瓊瓊杵尊時出誕彦
火火出見尊一曰宣以讓此也次生子遂崩葬筑
紫日向縁之中山之巔陵也即是矣延喜諸陵式
曰日向埃山陵

6．神代三陵取調書

鹿児島県立図書館　1冊

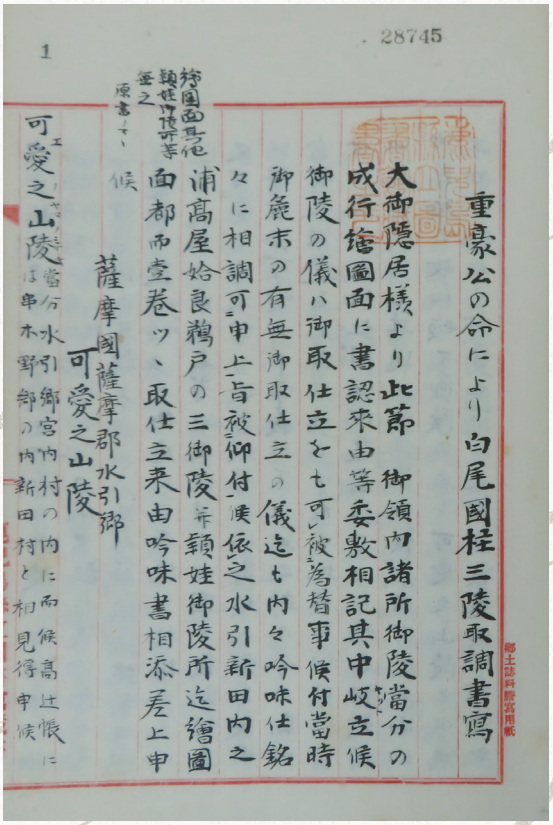
白尾国柱著。文化11年（1814）奥書。

本書は島津重豪の命により白尾国柱が神代三山陵について調査、および現地の役人からの報告書をまとめて著したものである。当時、国柱は御記録方添役であった。

すでに隠居していた重豪からは「御領内諸所御陵当分の成行、絵図面に書認、来由等、委敷相記」して提出するように命が下されたとある。参考として三山陵の他に頴娃御陵所の絵図面なども提出したようであるが、現存は未詳である。

写真は冒頭の重豪の命が記されている部分である。なお本書は『神代三山陵』（前掲資料1）に収録されている。

（亀井）


28745

1

重豪公の命により白尾國柱三陵取調書寫

大御隠居様より此節御領内諸所御陵當分の成行絵図面に書認來由等委敷相記其中岐立候御陵の儀ハ御取仕立とも可被為替事候付當時御麓末の有無御取仕立の儀迄も内々吟味仕銘々に相調可申上旨被仰付候依之水引新田内之浦高屋姶良鶴戸の三御陵并頴娃御陵所迄絵図面都而壹巻ツヽ取仕立来由吟味書相添差上申候

薩摩國面見絵図頴娃御陵所等無之

薩摩國薩摩郡水引郷

可愛之山陵

可愛之山陵　當分水引郷宮内村の内に而候高辻帳には中木野郷の内新田村と相見得申候

7．高屋御陵来由並吟味書草稿

鹿児島県立図書館　1冊

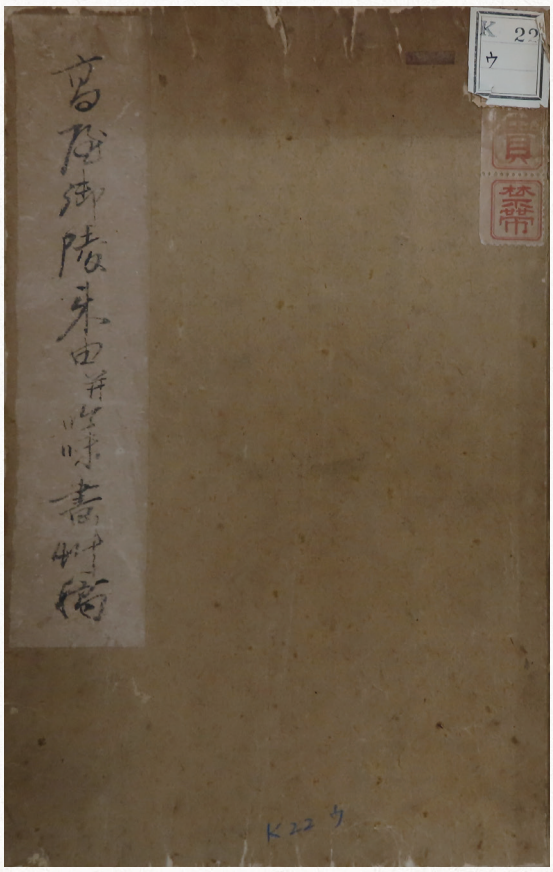
白尾国柱著。内題「内之浦高屋御陵来由并吟味書草稿」。

本書は『神代山陵考』（前掲資料５）の内、高屋山上陵に関する報告書。識語によれば、文政７年（1824）に白尾国柱より借り出して写したとある。筆写者は不明。

白尾国柱は高屋山上陵（彦火火出見尊陵墓）について内之浦郷小串村の国見岳山頂を候補地としてあげている。その理由として、彦火火出見尊（山幸彦）の后である豊玉姫が海神の娘であることから、海に近い内之浦が陵墓として選ばれたのではないかと推測している。

また延岡領の高千穂山へも言及しており、高屋山上陵について当時は様々な説があったことがわかる。

（亀井）



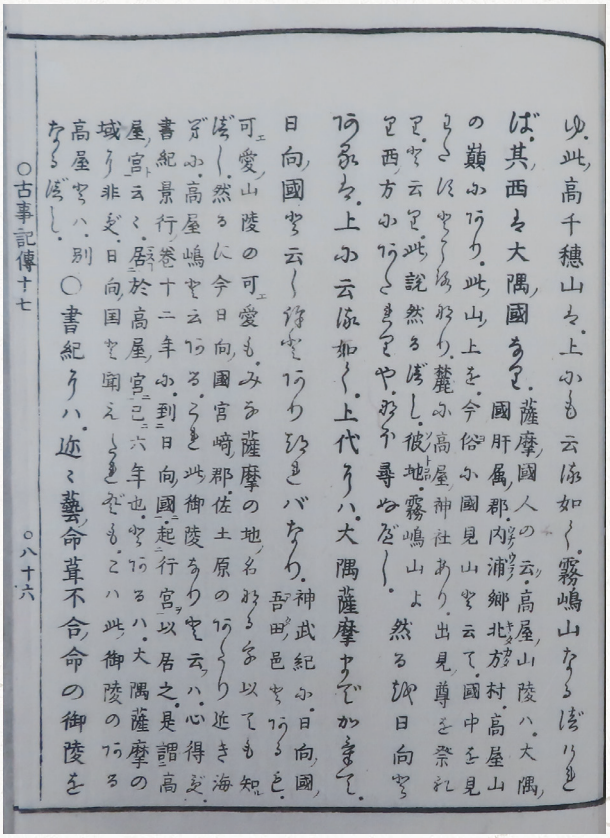
薩摩藩の国学者たちと本居宣長・平田篤胤

国学の大成者といわれる本居宣長の著書『古事記伝』において、三山陵は「薩摩ノ国人」の意見として白尾国柱の『神代山陵考』の内容が紹介されている（写真）。

白尾と本居宣長に直接の面識はないが、当時南九州を遊歴していた高山彦九郎が薩摩に来た折、白尾が『神代山陵考』を高山彦九郎へ渡し、その後、宣長門人の長瀬真幸（熊本藩士）を通じて、宣長の手に渡ったと考えられている。

後述の『霧嶋山幽郷真語』（資料９）では薩摩藩の八田知紀と平田篤胤との関係がうかがえる。このように薩摩藩の国学者たちの考えは、書物を通じ、現地の情報として国学の中心的な人物へも伝わっていった。

（小水流）



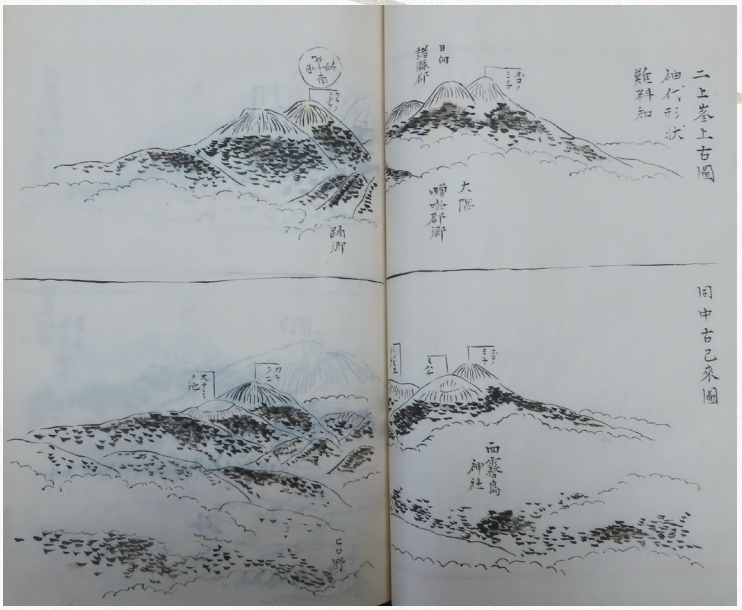
『古事記伝』巻17（鹿児島大学附属図書館蔵）

8．襲峯一覧

鹿児島県立図書館　1冊

本書は嘉永５年（1852）、八田知紀が襲峯（高千穂峰）含む霧島周辺と神話との関わりについてまとめた一冊である。前半は白尾国柱の稿本（『麑藩名勝考』）から、該当部分を抜き出してまとめたもので、後半部分に八田の考察がまとめられている。

写真は霧島山の姿（下段）と八田の考える神代の頃の姿（上段）である。天孫降臨の地を指す「添二上山」について、神代には大浪池部分は大きな山であったと八田は考え、二つの大きな山（大浪・韓国岳と御鉢・高千穂峰）が並んでいたとする。ここに八田独自の解釈がうかがえるが、この図は他の写本には見えない。



本書の跋文は八田知紀の門人であった大館晴勝（都城島津家家士）によるもので、藩内の学芸の広がりがうかがえる。

また本書は樺山資雄を通じて京都の国学者六人部是香に送られており、中央の学者らとの交流も垣間見える。

（小水流）

9．霧嶋山幽郷真語

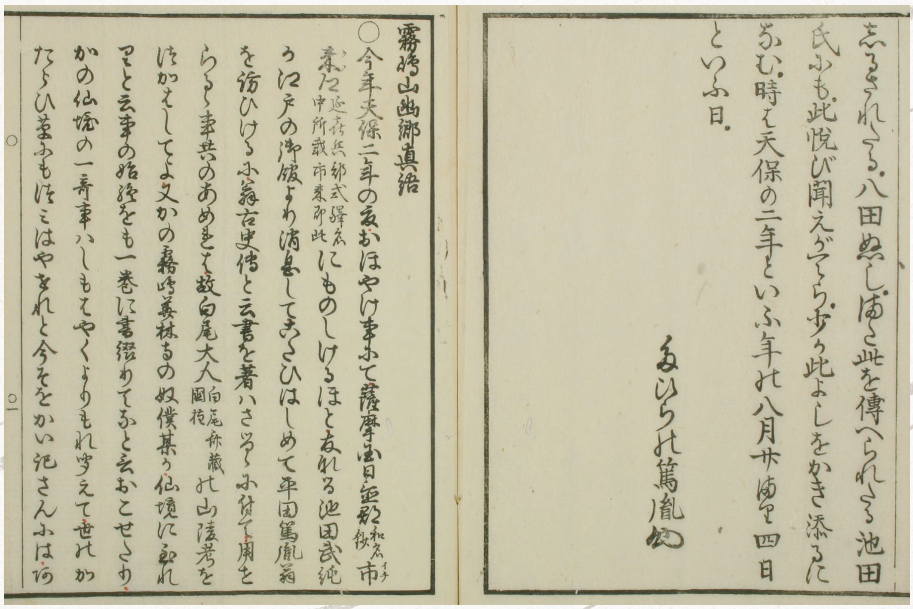
鹿児島大学附属図書館　1冊

薩摩国伊作田村の善五郎という人物が、霧島の山中にあった神境（神の世界）に入り、女仙たちの宮殿に行ったという奇特な経験を八田知紀が聞き取って著したものである。

八田からこの報告を伝え聞いた平田篤胤は、養子鋭胤にこの調書を「神の御たなの前に捧げて、拝」ませるほどの喜びようであったという。

橘南谿『西遊記』（1795）にも霧島山には仙人がいると書かれており、霧島は不可思議で神聖な場所という認識が広まっていたようである。

（小水流）


霧嶋山幽郷真語

○今年天保二年の夏おほやけ事ふて薩摩国日置郡和名抄市来乙迫郡式内名神名帳市来郡所載市来郡此中所載市来郡此にものしけるほとなれる池田武純うゑ戸の御殿より消息してふるひはしめて平田篤胤翁を訪ひけるに霧嶋古史伝と云書を著はさるゝ由を聞て其書共のあめるを故白尾大人白尾国柱翁藏れ山法考をらるゝ事共のあめるを故白尾大人白尾国柱翁藏れ山法考を借かしてよ又かの霧嶋奥林もの奴僕某の仙境に到れりと云事の始終をも一巻に書綴めてふると云おこせさす。かの仙境の一奇事ハしもてやくよりもれ聞えて世れかたゝひ来ふもほこはやをれと今そをかい記さんふは河

第３章　後醍院真柱（ごだいいんみはしら）

本章では後醍院真柱の著作を中心に、その学問的な素養や神代三山陵への興味を探りながら、後醍院真柱の神代三山陵研究の学問的な位置を考えたいと思います。
鹿児島県歴史・美術センター黎明館や鹿児島市立図書館所蔵の資料をご紹介します。

後醍院真柱について

文化２年（1805）生、明治12年（1879）没、75歳。薩摩藩士、国学者。大河平隆棟（おこびらたかむね）の二男として生まれ、後醍院良次の養子となります。通称は彦次郎。号は玉廼舎、自凝舎。

和歌は八田知紀に学び、江戸では平田篤胤の門人となり国学を修めますが、嘉永３年（1850）お由羅騒動に連座し謹慎を命じられます。のちに許されて藩校造士館の助教となります。

維新後は明治政府が設立した皇学所御用掛・教部省御用掛などを歴任し、明治10年に吉備津神社（きびつじんじゃ）宮司となります。

本貴重書展ではこれまで展示される機会が少なかった、鹿児島市立図書館所蔵の大河平隆棟（後醍院真柱父）自筆資料や若き後醍院真柱の紀行文などを展示します。　（亀井）

『後醍院真柱翁出廬事蹟実録』
（鹿児島大学附属図書館蔵）

10. 後醍院真柱造士館助教辞令（ごだいいんみはしらぞうしかんじょきょうじれい）

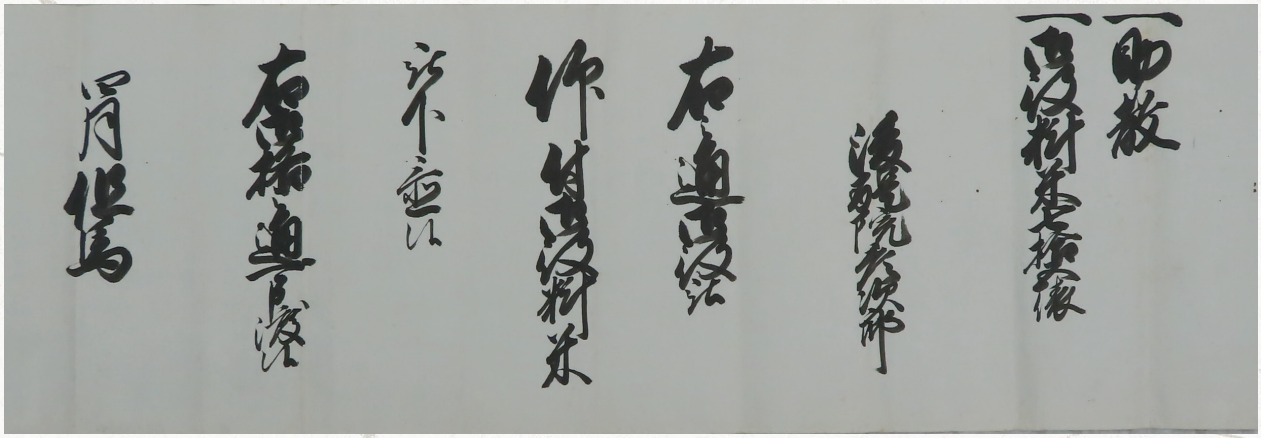
鹿児島県歴史・美術センター黎明館　１紙

本資料は後醍院真柱を造士館の助教に任命し、その役料として米75俵を与えるという内容の辞令である。万延元年（1860）４月のものである。

造士館では訓導師、句読師、都講、助教、教授と昇進するが、後醍院は安政５年（1858）に訓導師に任じられ、わずか２年で助教へ昇格していることがわかる。

（亀井）

一、助教
一、御役料米七拾五俵
後醍院彦次郎
右之通、御役被
仰付御役料米
被下置候。
右、御格之通可申渡候。
四月　但馬



11. 神社伝記

大河平隆棟自筆　鹿児島市立図書館　3冊

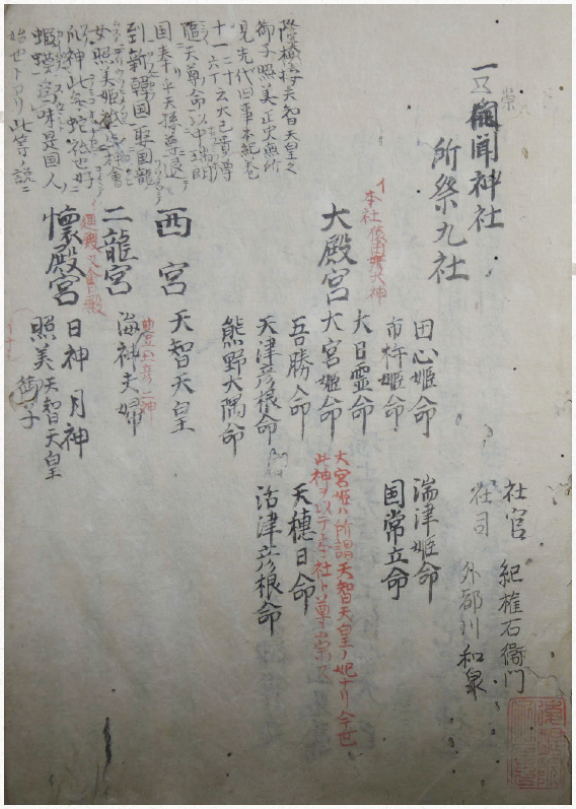
著者の大河平隆棟（1774－1809）は後醍院真柱の父にあたる。隆棟は文化朋党事件（近思録崩れともいう。藩主斉宣の藩政改革に対し前藩主重豪が反発した御家騒動）に連座した人物である。真柱の父も国学に傾倒しており、真柱への学問的な影響を考える上で興味深い。本書は文化５年（1808）にまとめられている。

本書は巻２～４の３冊しか現存していないが、薩摩・大隅・日向の神社の祭神や縁起・社司を記し、縁起について自身の見解なども示しており、藩内の神社総覧ともいえる書物である。

本書では高屋山陵を現在の溝辺とは異なる内之浦の地にあると比定しており、後醍院もこの説を引き継いでいるといえる。

また考証だけでなく、大隅の蛭児神社付近にあったとされる「奈気木杜」や「気色の杜」を詠んだ古今和歌集の名歌を載せるなど隆棟の文学的素養もうかがえる。

（亀井）



12. 山陵考

後醍院真柱自筆　鹿児島市立図書館　1冊

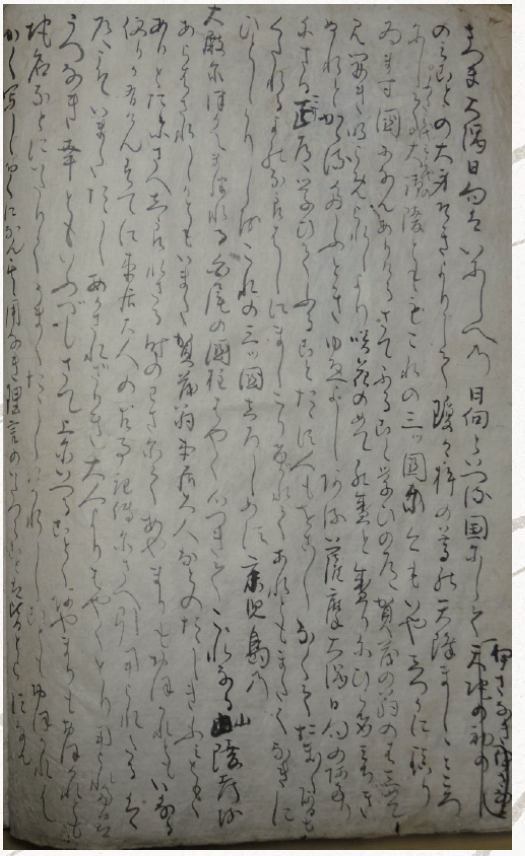
本書は当時18歳だった後醍院真柱が白尾国柱『神代山陵考』（前掲資料５）を書写し、その冒頭に真柱が白尾や『神代山陵考』への評価・感想を記したものである。

後年自らがこの三山陵について考証することになるとは思っていなかったかもしれないが、すでに早い段階から三山陵へ関心を示したことがうかがえる資料と言えよう。

本書の書写された文政５年（1822）の前年に白尾国柱が没しており、先達への敬意や功績を称えるとともに、追悼の意味もあったのかもしれない。

写真は見返しに附された真柱の文章で「（神代山陵考が）本居（宣長）大人の古事記伝にさへ引用られたるは、道こそいまだただしあかされざりき（ママ）大人よりはやくとり用られたるは、うへなき幸ともいふべし」と白尾国柱を称えている。

（亀井）



13. にひさち

後醍院真柱自筆　鹿児島市立図書館　1冊

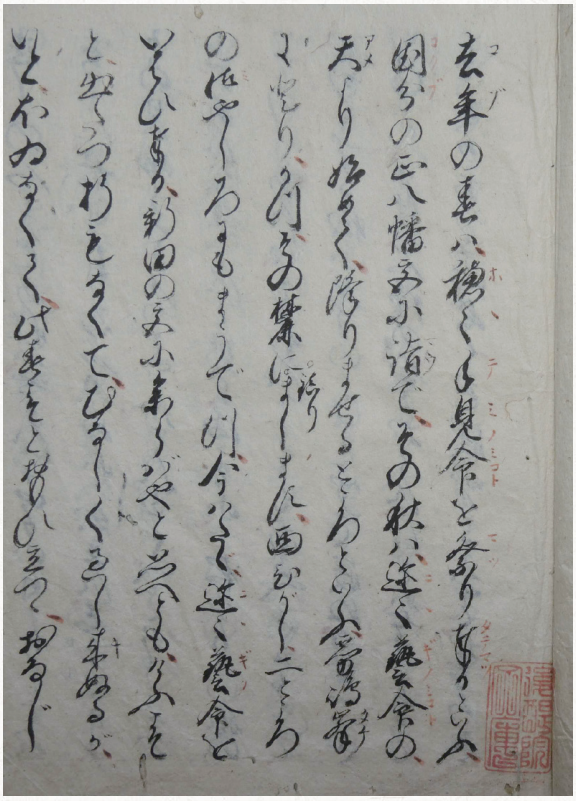
本書は後醍院真柱22歳の時に新田八幡宮へ参詣した際の紀行文。文政９年（1826）３月15日に出発（１泊２日）し、同月22日に成稿している。

冒頭には前年春に彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）を祀る国分の正八幡宮（鹿児島神宮）へ参詣し、その年の秋には瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）が降り立ったとされる霧島山にも登っていることが記されている。

瓊瓊杵尊を祀る新田神宮への参詣は松田・志和地・池水といった友人らと同行し、道中、和歌を詠んだり、平佐（ひらさ）城や島津家久ゆかりの称名寺（しょうみょうじ）を訪れたりしている。

書名は真柱の和歌「今よりは新田（にひた）の宮の新幸（にひさち）もいや広がらんかの川のごと」による。真柱の学問的好奇心がうかがえる資料と言えよう。

（亀井）



14. 参宮日記（さんぐうにっき）

後醍院真柱自筆　鹿児島市立図書館　1冊

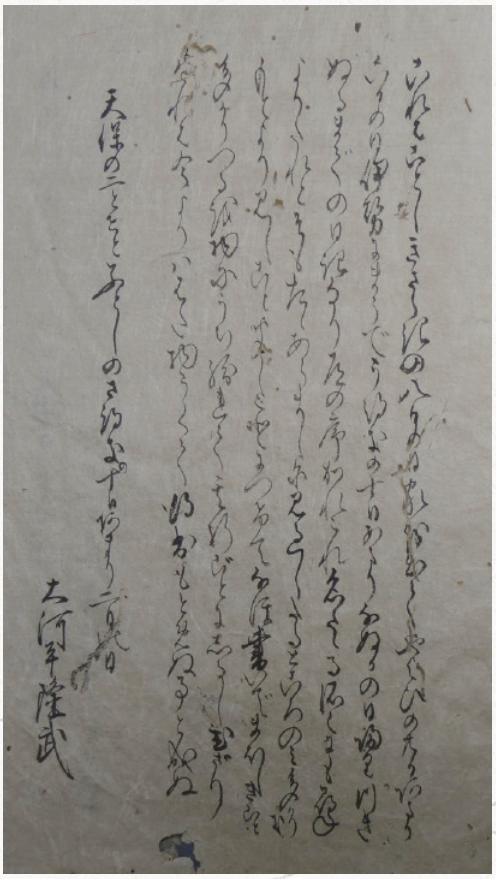
後醍院真柱（当時は大河平隆武）27歳の時に伊勢神宮へ参詣した際の紀行文。天保２年（1831）２月８日出発し、３月16日に伊勢神宮内宮外宮参拝、４月17日鹿児島へ帰国するまでの69日間の日記である。

真柱はこの数年前から伊勢神宮への参拝を考えていたが家族にひきとめられることを恐れてひそかに準備していた。そのため同行するはずの江夏千柱（こうかちはしら）に遅れて出発することになり、追いかける形で旅は始まっている。

下関では風待ちのために足止めされ、京都では路銀がつき、京都藩邸にいた親類に借金を依頼するなど若い頃の後醍院真柱の微笑ましい冒険譚が記されている。

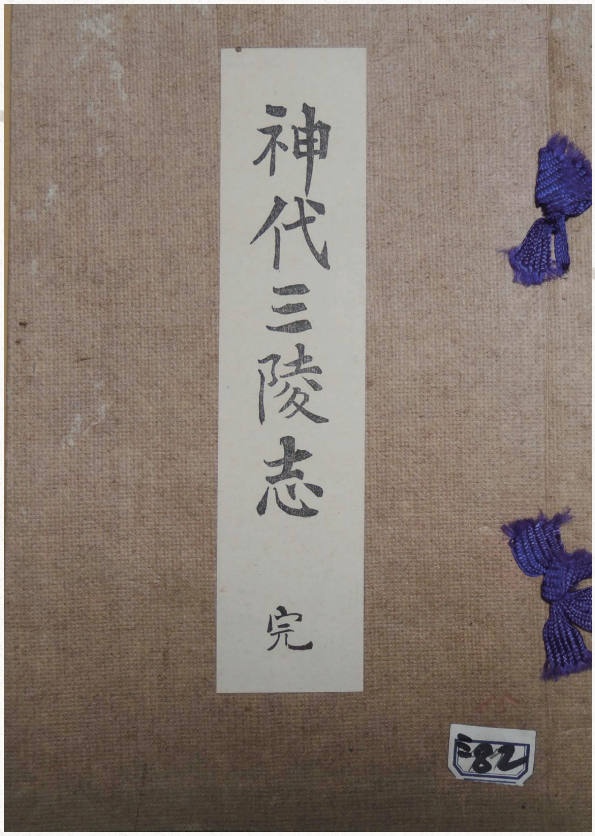
本文からは「世の中の有さま何ごともみな神の御計らひにもるることなければ」など真柱の神への傾倒がうかがえるが、名所旧跡を巡る様子や自詠の和歌がちりばめられていることから物見遊山的な旅であったと考えられる。

（亀井）



15. 神代三陵志（じんだいさんりょうし）

鹿児島市立図書館　1冊



後醍院真柱著。昭和４年（1929）刊。後醍院良望発行。

本書は白尾国柱『神代山陵考』（前掲資料５）を受けて、真柱が三山陵の所在を考証した研究書である。後醍院は三山陵を次のように考えていた。

可愛山陵は白尾国柱説とは異なり、現在の位置と同じ新田神社のある八幡山。この説は平田篤胤が『古史伝』第31巻に引用し、一定の評価を受け、現在の位置に定まったといえる。

吾平山上陵は白尾国柱説と同じく、現在の鹿屋市吾平町。

高屋山上陵は内之浦の国見岳山頂（肝属郡肝付町）。ただ後醍院は『古事記』にある「高千穂山の西に在り」という記載と内之浦とが離れすぎていることから、鹿児島神宮あたりではないかという説も紹介している。しかし明治元年に真柱はこの霧島の地を実見したうえでやはり溝辺は高屋山上陵ではないと断定している。

なお本書の自筆稿本が鹿児島市立図書館に所蔵されている（後掲資料16）。　（亀井）

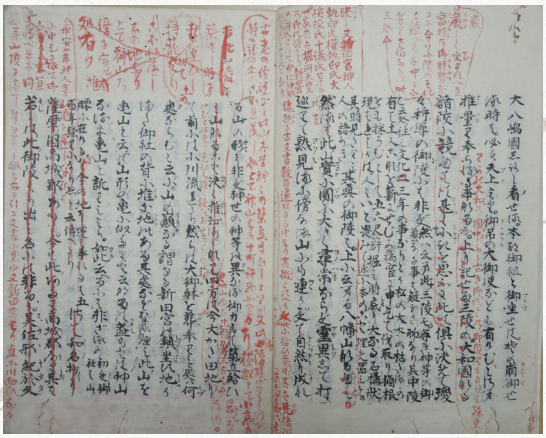
16. 神代三陵志稿本

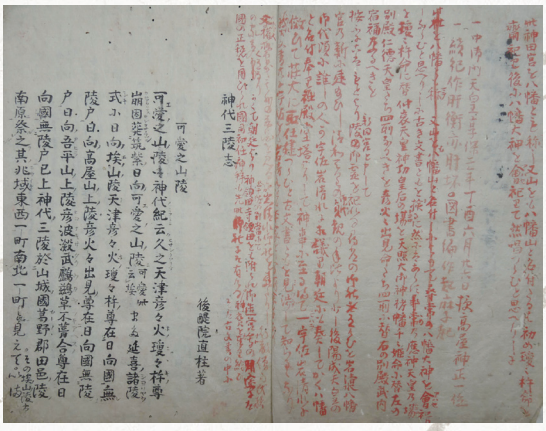
後醍院真柱自筆　鹿児島市立図書館　４冊

文政10年（1827）に第１次稿本が書き始められ、以後、本人による推敲をへて、明治元年（1868）に実地踏査を経て完成した。ついで明治２年に鹿児島藩の三島通庸（みしまみちつね）・三雲春彦（藤一郎）らを通じて神祇官へ提出された。

第１次第２次稿本ともに、可愛山陵について考証が行われており、後醍院の興味、あるいは考証の順番を考える上で非常に興味深い資料といえる。

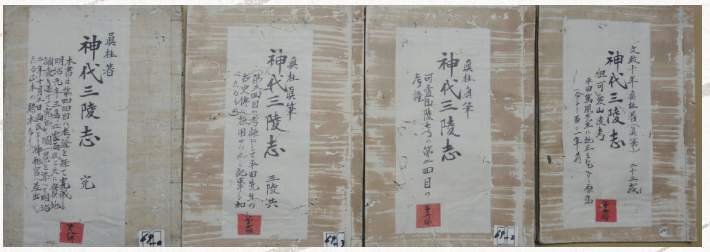
第４次稿本表紙に書かれた後人の注記（写真下左）によれば、本書はその神祇官へ提出された正本の写しとされるが、扉部分には「諸陵課印」が押されており、正本の写しかどうかは考える余地がある。





また本書には蔵書印「後醍院文庫」が押されており、真柱旧蔵であると考えられる。

（亀井）



第４章　祭神

本章では、可愛山陵に葬られたと言われている瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）を現在主祭神として祀っている新田神社（中世には新田八幡宮）と、高屋山上陵に葬られたと言われている彦火火出見尊（ヒコホホデミノミコト）を現在主祭神として祀っている鹿児島神宮（中世には大隅国正八幡宮）の主祭神の歴史的変化を見ていきたいと思います。

祭神について

新田宮は、11世紀前期に史料的に存在が確認され、本来は洪水を繰り返す川内川流域において再開発の結果生み出された「新田」における農業活動を保障する農業神が祀られていたと考えられます。日本国内外諸勢力の紛争の影響により、農業神に八幡神を合祀する事により、新田宮は新田八幡宮となりました。

大隅国正八幡宮の前身である鹿児島神社は10世紀前期に史料的に存在が確認され、大隅国正八幡宮は、史料的に11世紀前期に存在が確認されています。本来活火山である鹿児島（現在の桜島）を神として祀った神社が鹿児島神社であり、日本国内外諸勢力の紛争の影響により、鹿児島神社に八幡神を合祀して大隅国正八幡宮が成立しました。

両神社とも、江戸時代は国学等の影響で、瓊瓊杵尊・彦火火出見尊が主祭神として祀られるようになり、祭神が変化している事が確認されます。

本章では、新田宮や大隅国正八幡宮の祭神に関する史料を中心に取り扱っていきます。　（日隈）

17. 寺家政所下文案（じけまんどころくだしぶみあん）

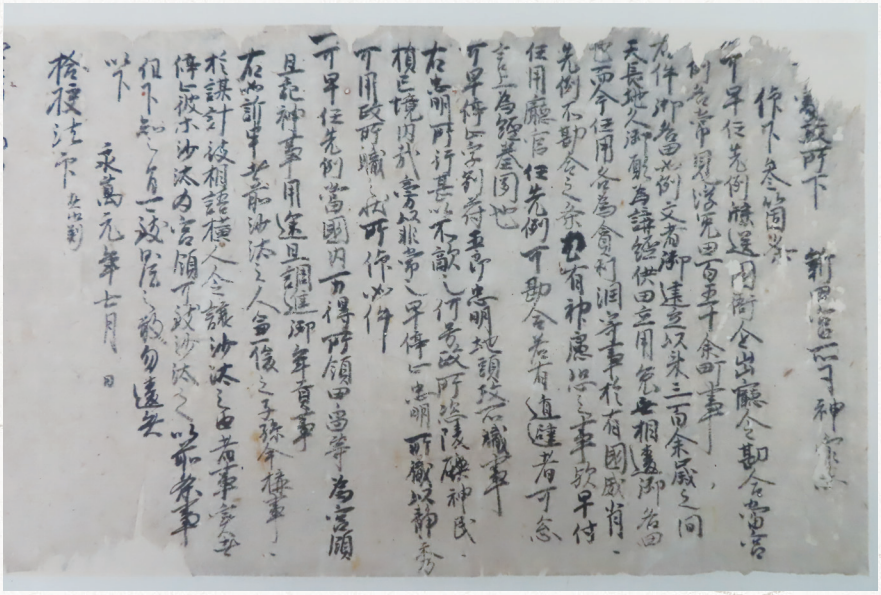
重要文化財　新田神社（薩摩川内市川内歴史資料館寄託新田神社文書）

本文書は、永万元年（1165）７月に寺家（宇佐弥勒寺（うさみろくじ）、宇佐八幡宮の神宮寺）から新田宮所司（新田宮本来の神宮寺である弥勒寺の幹部級僧侶、新田宮の運営に深く関わっている）・神官に対して出された文書であり、新田宮現存文書の中で最古の文書である（鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ10』、平成17年）。

本文書１か条目に、新田宮浮免田（うきめんでん）を国司側と話し合って公領に早く設定するように記載されている。

本文書には、新田宮浮免田は300年以上の歴史を持つ事が記載されているが、新田宮の存在を示す最古の確実な史料は11世紀前期である。新田宮の成立もその頃であると考えられる。

（日隈）



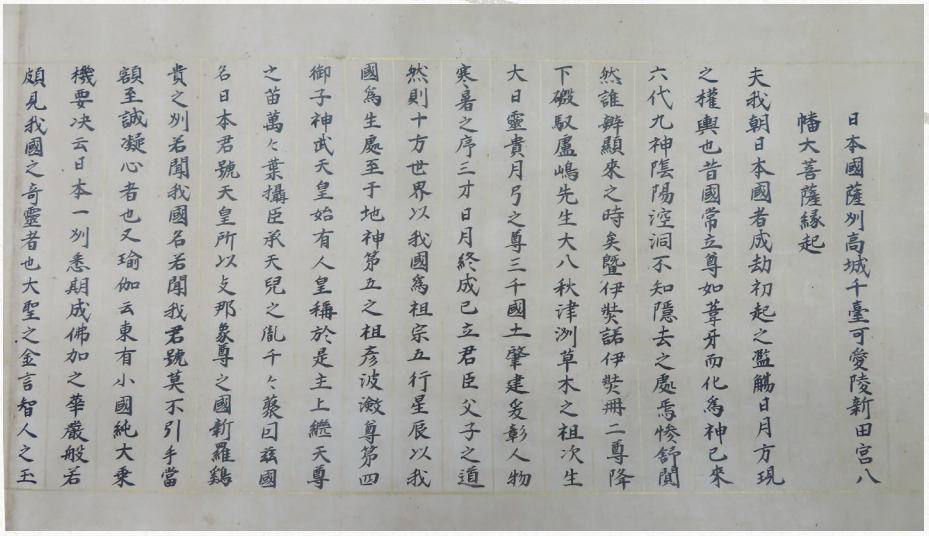
18. 新田宮縁起（にったぐうえんぎ）

重要文化財　新田神社（薩摩川内市川内歴史資料館寄託新田神社文書）

本縁起は、「日本国薩州高城千台可愛陵新田宮八幡大菩薩縁起」が正式名称で、薩摩国高城郡千台に位置し、可愛山陵のある場所に鎮座している新田宮八幡大菩薩の縁起であることが記載されている。

本縁起は建保甲戌（２年、1214年）３月　日に記載されたように書かれているが、可愛山陵が記載されている事を踏まえると、本縁起が実際に書かれたのは寛文５年（1665）仲夏（５月）10日の記載があるように、可愛山陵の候補地の一つとして新田宮付近が考えられるようになったのは江戸時代であると考えられる。

（日隈）


日本國薩州高城千臺可愛陵新田宮八
幡大菩薩縁起
夫我朝日本國者成劫初起之盤觸日月方現
之權輿也昔國常立尊如葦牙而化為神已來
六代九神隱陽涇洞不知隱去之處焉悠舒闌
然誰辨顯來之時矣暨伊奘諾伊奘冊二尊降
下磯馭盧嶋先生大八秋津洲草木之祖次生
大日靈貴月弓之尊三千國土肇建爰彰人物
寒暑之序三才日月終成已立君臣父子之道
然則十方世界以我國為祖宗五行星辰以我
國為生處至于地神第五之祖彦波瀲尊第四
御子神武天皇始有人皇稱於是主上繼天尊
之苗萬々葉攝臣承天兒之胤千々襲因茲國
名日本君號天皇所以支那象尊之國新羅鷄
貴之州若聞我國名若聞我君號莫不引手當
額至誠凝心者也又瑜伽云東有小國純大乘
機要決云日本一州悉期成佛加之華嚴般若
頗見我國之奇靈者也大聖之金言智人之玉

19. 新田神社実蹟明細書（にったじんじゃじっせきめいさいしょ）

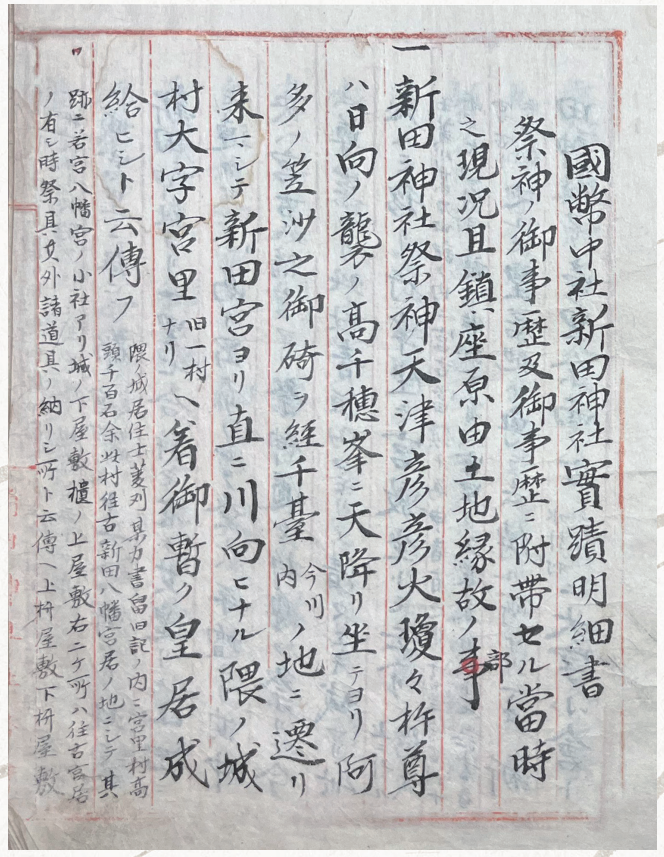
新田神社

本史料は、明治27年（1894）新田神社宮司権執印（ごんしゅういん）正幸氏により編纂された史料。権執印正幸氏は、執印を補佐した権執印家の出で、明治維新後、新田神社が国幣中社となってから最初の宮司である。

本明細書は、新田宮祭神の事、摂社末社の事、社家の事、朝廷・幕府の崇敬に関する事、祭式の事、神社造営に関する事、神社境域の事、氏子の事、宝物・古文書の事等が記録され、当該期の新田神社宮司の新田宮に対する認識が分かる。新田神社の歴史を調べる上で重要な史料である。

写真は新田宮祭神に関する部分の冒頭である。

（日隈）


國幣中社新田神社實蹟明細書
祭神ノ御事歴及御事歴ニ附帯セル當時
之現況且鎮座原由土地縁故ノ事部
一新田神社祭神天津彦彦火瓊々杵尊
ハ日向ノ襲ノ高千穂峯ニ天降リ坐テヨリ阿
多ノ笠沙之御碕ヲ経千葺今川内ノ地ニ遷リ
来ルシテ新田宮ヨリ直ニ川向ヒナル隈ノ城
村大字宮里旧一村ナリ〈着御暫ノ皇居成
給ヒシト云傳フ
隈ノ城居住士族列挙力書留旧記ノ内ニ宮里村高
頭子百石余此村往古新田八幡宮居ノ地ニシテ其
跡ニ若宮八幡宮ノ小社アリ城ノ下屋敷櫃ノ上屋敷右二ケ所ハ往古宮居
ノ右ニ時祭其外諸道具ノ納リシ所ト云傳〈上杵屋敷下杵屋敷

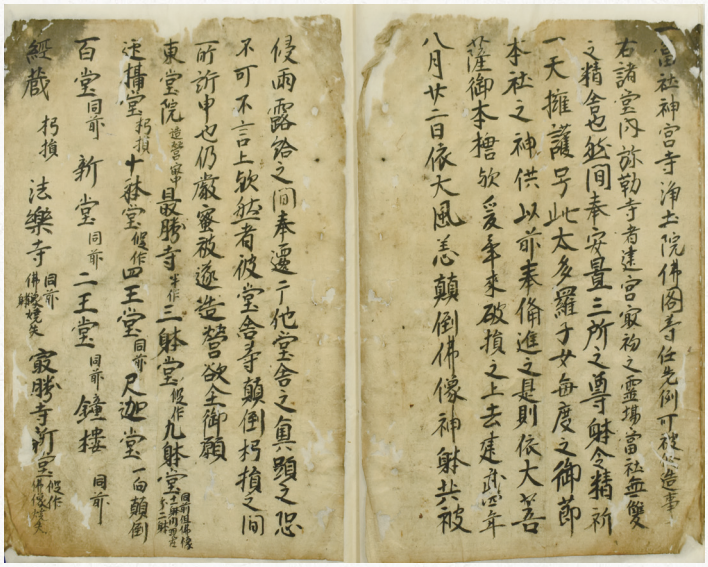
20. 正八幡宮講衆・殿上等訴状

個人蔵（霧島市教育委員会寄託）

本史料は、暦応２年（1339）11月日付大隅国正八幡宮講衆・殿上等訴状（前出『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ10』に収載）である。大隅国正八幡宮の歴史を解明する上で極めて重要な史料である。

写真は、「一　当社神宮寺浄土院仏閣等任先例可被修造事」項である。本項によって当該期に大隅国正八幡宮の神宮寺は浄土院であったことがわかる。また浄土院内の堂舎の名が分かり、蒙古襲来の影響から太多羅子女（神功皇后）が大隅国正八幡宮の祭神の中で重視されていた事もうかがえる。

（日隈）



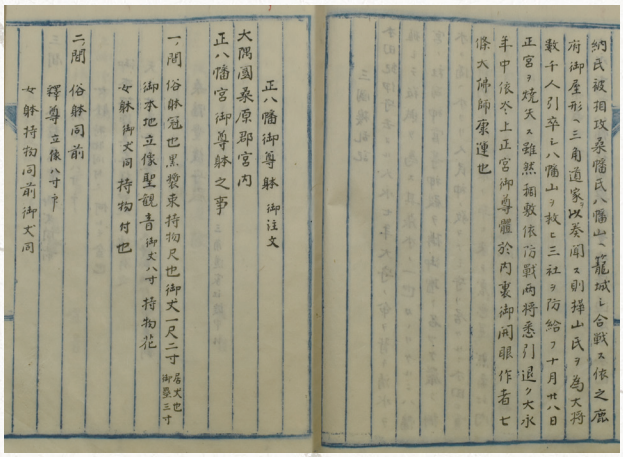
21. 大隅正八幡宮尊体注文

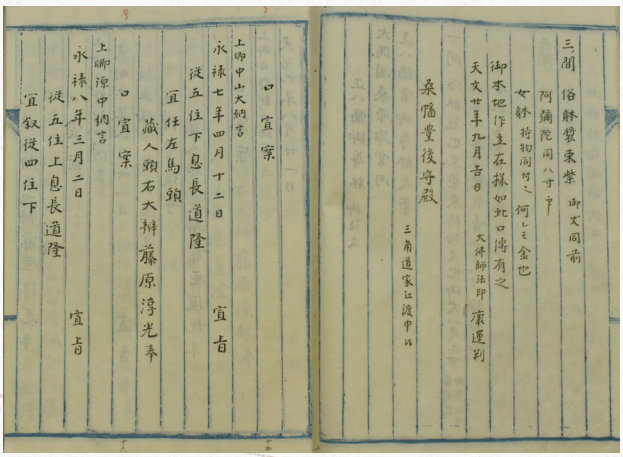
個人蔵（霧島市教育委員会寄託）

本史料は、天文20年（1551）９月吉日大仏師法印康運が桑幡豊後守宛に作成した大隅国正八幡宮祭神である八幡神の尊体が書き上げられている文書である（前出『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ10』）。当時は神仏習合であるので、神社祭神の尊体は本地仏である。

本史料は、戦国期大隅国正八幡宮祭神の本地仏が仏師により記録されている貴重な史料であるとともに宗教史の立場から見ても興味深い史料である。

（日隈）





第５章　神代三陵と明治政府

本展示で見てきた江戸時代から明治時代にかけての論争は、白尾国柱が藩命を受けて『神代山陵考』を著したことから始まりました。それに続いた後醍院真柱は文政５年（1822）、18歳の時にこの『神代山陵考』を書写し、三山陵に強い関心を示していました。その５年後に書き始められた『神代三陵志』は複数の稿本をへて、明治２年（1869）に明治政府へ提出されました。本章ではその後、三山陵がどのようになったのかを見ていきたいと思います。

神代三陵論争の結末

当初から異存のなかった吾平山上陵は現在の鹿屋市吾平町上名、可愛山陵は後醍院真柱の説を根拠として、現在の薩摩川内市宮内町にある神亀山（新田神社境内）に定まりました。

また江戸時代から諸説が提示されていた高屋山上陵は明治になってさらに三島通庸、樺山資雄、田中頼庸らが調査し、現在の霧島市溝辺町麓に比定しました。

明治７年（1874）７月には当時の宮内省によって神代三陵は現在の場所に治定しますが、治定前の明治５年には明治天皇が鹿児島へ行幸の際に遙拝（遠くから拝むこと）されました。それ以降、皇太子・皇族による遙拝、参拝が行われるようになりました。

（亀井）

鹿児島市郷土課「神代三山陵」リーフレット（個人蔵）

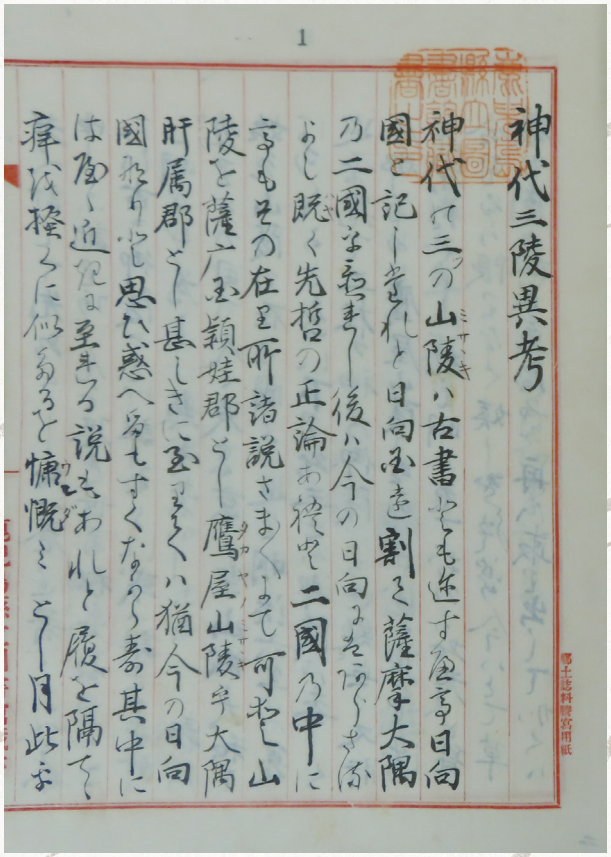
22. 神代三陵異考

鹿児島県立図書館　１冊

明治７年５月の著者樺山資雄の序文によれば、山陵治定の勅によって明治６年夏、東京より山陵のある国々を巡る官吏が鹿児島にも下り、詳しく調査、肝付郡の山陵は鷹屋山陵（高屋山陵）でないことを確定したが、これは自説と一致するものであったため、秘蔵しておいた草稿を清書したという。樺山は、新田神社所蔵文書を根拠として、ミコトの陵は山頂にあり、かつて白尾国柱が『薨藩名勝考』で中陵をミコトの陵としたのを批判する（「国柱ガ中陵ナリト云ヒシハカヘスガヘスモイブカシクナム」）。また、高屋山上陵について、内之浦郷の国見嶽に比定するのを批判、溝辺郷が妥当とし、吾平山上陵について『和名抄』が肝付郡として収録したのは錯簡であるとする。

本書の鹿児島県立図書館への受入れが昭和10年夏であるので、翻刻が収録された鹿児島史談会編『神代三山陵』（昭和10年刊）の底本ないしは参考資料として利用された可能性が高い。

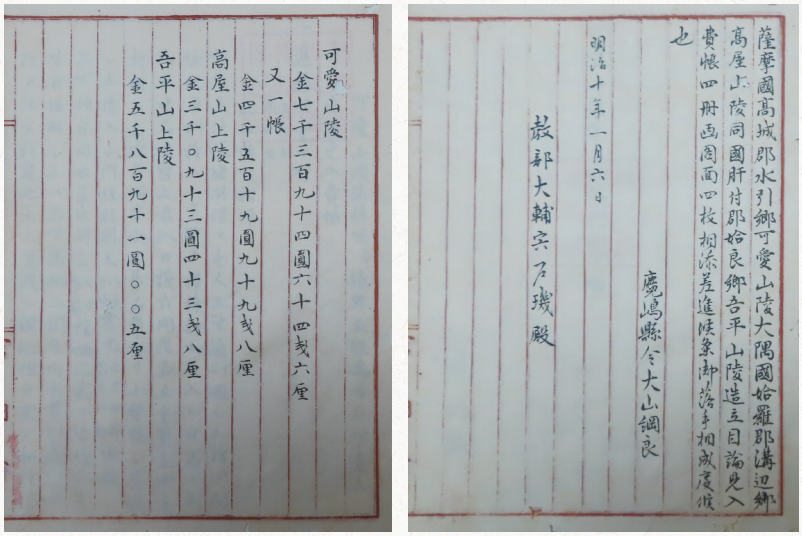
（丹羽）



23. 神代三陵造立目論見入費帳（じんだいさんりょうぞうりゅうもくろみにゅうひちょう）

鹿児島県立図書館　1冊

明治７年（1874）鹿児島県下の神代三陵の位置確定を受けて、教部省官員が出張し、神代三陵の修造について協議が行われ、明治10年（1877）１月６日県令大山綱良が教部大輔宍戸璣（ししどたまき）に、三山陵造立目論見入費帳４冊に画図４枚を添えて提出した。本書はその写しである（ただし画図を欠く）。


可愛山陵
金七千三百九十四圓六十四錢六厘
又一帳
金四千五百十九圓九十九錢八厘
高屋山上陵
金三千〇九十三圓四十三錢八厘
吾平山上陵
金五千八百九十一圓〇〇五厘

薩摩國高城郡水引郷可愛山陵大隅國姶羅郡溝辺郷高屋山陵同國肝付郡姶良郷吾平山陵造立目論見入費帳四冊画図四枚相添差進候条御落手相成度候也
明治十年一月六日
鹿嶋縣令大山綱良
教部大輔宍戸璣殿

大山県令が宍戸璣に提出した文書の写し（右）と三山陵の入費の総額（左）

三陵それぞれに対して、遙拝所、境界玉垣、鳥居、石垣、道路などの施工の具体的な方法、それぞれの建設費用を算出している。可愛山陵は二種類の見積書を掲載しているが、それぞれ総額7394円64銭６厘と4519円99銭８厘（後者は境界玉垣の長さや職人の数などが少なく見積もられ総額が抑えられている）。高屋山上陵が3093円43銭８厘、吾平山上陵が5891円５厘である。

本書は鹿児島史談会編『神代三山陵』（前掲資料１）に翻刻されている。

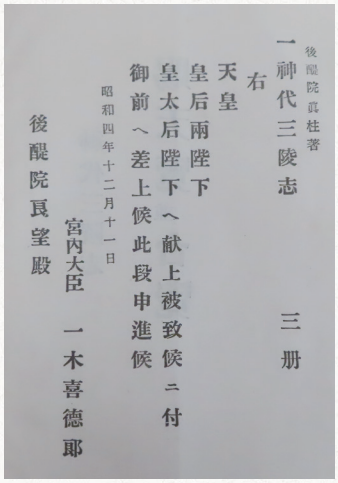
（丹羽）

24. 後醍院真柱翁出廬事蹟実録（ごだいいんみはしらおうしゅつろじせきじつろく）

鹿児島大学附属図書館　1冊

真柱は明治元年（1868）11月５日、神祇官再興に伴って上洛を命じられ、完成したばかりの『神代三陵志』を携え自宅（のちに鹿児島市立松原尋常小学校、現在の天文館公園）を出発した。これを記念した「出廬碑」を、昭和５年（1930）息子の後醍院良望（当時75歳）が生前不遇であった父の顕彰のため私財を投じて建設した（現存）。

後醍院氏の孝心から
眞柱先生出廬碑
けふ松原校側で除幕
後醍院先生と出廬碑
（今日除幕式を行ふ）


後醍院真柱著
一神代三陵志　三冊
右
天皇
皇后兩陛下
皇太后陛下へ献上被致候ニ付
御前へ差上候此段申進候
昭和四年十二月十一日
宮内大臣　一木喜德郎
後醍院良望殿

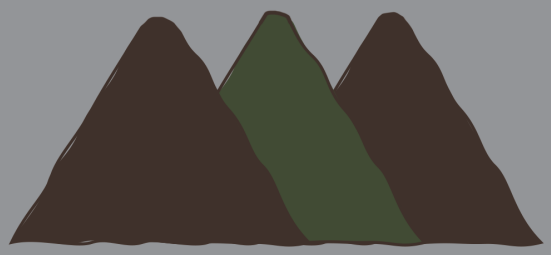
『後醍院真柱翁出廬事蹟実録』の『神代三陵志』献上の記事（右）と
「出廬碑」除幕式当日（昭和５年11月３日）の鹿児島新聞（鹿児島県立図書館蔵、左）

本書は同年11月３日の除幕式に配られた小冊子（全26ページ）である。真柱の『神代三陵志』の天皇・皇后・皇太后に上覧に供えたこと（昭和４年12月、写真右）、碑文の翻刻、真柱が出発の際、門人を中心とした薩摩の国学者ら―田中頼庸、宇都宮快哉、郡山一介（無陰）、児玉源之丞（天雨）、関盛長、諏訪菅彦、川上親雄、三原武文、是枝生胤ら―が贈った送別の詩歌・文章などを掲載する。

（丹羽）

展示品リスト

通番	資料名	所蔵機関	請求記号・目録番号
第１章　神代三陵とはなにか			
1	高屋山上陵	鹿児島県立図書館	K22/ ミ
2	首註陵墓一隅抄	鹿児島大学附属図書館	288.46/Sh99
3	神代三山陵	鹿児島大学附属図書館	092.8/Ka39
4	鼇頭古事記	鹿児島大学附属図書館	玉里・天の部1番9
5	日本書紀	鹿児島大学附属図書館	玉里・天の部1番1
6	麑藩名勝考	鹿児島大学附属図書館	玉里・天の部114番1001
7	古事記系図	鹿児島大学附属図書館	玉里・地の部6番2086
8	三国名勝図会	鹿児島大学附属図書館	玉里・天の部69番618
第２章　薩摩藩の学者たち			
9	神代山陵考	鹿児島県立図書館	K22/ シ
10	神代三陵取調書	鹿児島県立図書館	K22/ シ
11	高屋御陵来由並吟味書草稿	鹿児島県立図書館	K22/ ウ
12	古事記伝	鹿児島大学附属図書館	210.3/Mo88
13	襲峯一覧	鹿児島県立図書館	K29629/ ｼ852
14	霧嶋山幽郷真語	鹿児島大学附属図書館	172/H43
第３章　後醍院真柱			
15	自凝舎後醍院真柱先生伝	鹿児島大学附属図書館	092.8/J48
16	後醍院真柱造士館助教辞令	鹿児島県歴史・美術センター黎明館	
17	神社伝記	鹿児島市立図書館	
18	山陵考	鹿児島市立図書館	
19	にひさち	鹿児島市立図書館	
20	参宮日記	鹿児島市立図書館	
21	神代三陵志	鹿児島市立図書館	
22	神代三陵志稿本	鹿児島市立図書館	
23	古史伝	鹿児島市立図書館	
第４章　祭神			
24	新田宮縁起（複製）	薩摩川内市川内歴史資料館	
25	新田神社実蹟明細書	新田神社	
26	三国名勝図会	鹿児島大学附属図書館	
27	正八幡宮講衆・殿上等訴状	個人蔵（霧島市教育委員会寄託）	
28	大隅正八幡宮尊体注文	個人蔵（霧島市教育委員会寄託）	
29	大隅国桑原郡鹿児島神社旧記	個人蔵（霧島市教育委員会寄託）	
第５章　神代三陵と明治政府			
30	神代三山陵リーフレット	個人蔵	
31	神代三陵志	鹿児島県立図書館	K22/ ゴ869
32	神代三陵志	鹿児島県立図書館	K22/ ゴ869
33	神代三陵異考	鹿児島県立図書館	K22/ カ875
34	神代三陵造立目論見入費帳	鹿児島県立図書館	K22/ シ
35	後醍院真柱翁出廬事蹟実録	鹿児島大学附属図書館	289.1/G55



令和４年度 鹿児島大学附属図書館・霧島市教育委員会共催 貴重書公開

神をめぐる人々―薩摩藩の学者たち―

編　者
亀井森（鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系准教授）

解題執筆者
小水流一樹（霧島市教育委員会社会教育課主任主事）
日隈正守（鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系教授）
丹羽謙治（鹿児島大学学術研究院法文教育学域法文学系教授）
亀井森

解題執筆協力者
岩佐康祐・大島章太朗・西薫・別府ほの美
（教育学部４年　亀井ゼミ）

発　行
鹿児島大学附属図書館
https://www.lib.kagoshima-u.ac.jp/
〒890-0065 鹿児島市郡元 1-21-35
☎099-285-7460

発行日
令和４年 11 月７日

印　刷
斯文堂株式会社